

ダニエル・ストラック著『近代文学の橋：風景描写 における隠喩的解釈の可能性』

安河内，敬太
九州大学大学院地球社会統合科学府：博士後期課程

<https://doi.org/10.15017/1525860>

出版情報：九大日文. 24, pp.81-83, 2014-10-01. 九州大学日本語文学会
バージョン：
権利関係：

ダニエル・ストラック著

『近代文学の橋——風景描写 における隠喩的解釈の可能性——』

安河内 敬太

本書は複数の近代文学作品における、橋を中心とする風景描写に注目し、それらがどのような意味を暗示しているのかを手がかりに、作品の解釈を行ったものである。

著者は「時代と場所を超えて」と題された序章において、柄谷行人による日本近代文学における「風景」に関する指摘を引きつつ、「舞台の風土によって意味を生成させ」る「歌枕」から、「プロットの展開や登場人物の心境に調和した形で描き出される」「風景描写」へという変化に関して述べている。そして、それを探るに当たり、いかなる時代にも登場し、古来象徴の意味が込められてきた橋に注目することで、「近代文学に見られる風景描写の「情景」的役割を見極めること」を企図すると述べ、橋を重視する理由を明らかにしている。

また、その際における筆者の「明らかな直喩や、言語に偏在している隠喩的性質よりも、小説の描写に潜在する隠喩の体系

性を調査の対象とする」という態度が、本書において時に橋以外の風景描写に関して、詳細な考察が施される所以となっているのである。以下章ごとの内容を、橋にまつわる指摘を中心に紹介するが、そのような本書の性格上、ここで割愛した部分があるが、必ずしも作品の解釈において些末なものであるとは言えない。

一章「かけはしの記」に見られる子規の理由なき反抗では、まず松尾芭蕉の「おくの細道」における、「歌枕」としての橋への言及、及び同じく芭蕉の「更級紀行」における「棧」の描写と全体の主題との不調和について述べる。その上で、「かけはしの記」において、正岡子規が「棧」の探求を通して「歌枕」を乗り越えるべき対象として認識し始めていることを指摘している。ただし、「かけはしの記」本文の解釈には、いささか強引な箇所が見られる。

二章「鏡花の境界性と民俗受容」では、泉鏡花の「化鳥」に登場する母親について、「橋姫」や「天の羽衣」と言った民間伝承を手がかりとして考察し、それらの伝承を連想させる母親の神秘的描写を、鏡花が母性の礼賛のために導入していると指摘する。そして作中において「常識」と「神話」という二つの領域を隔てていると考えられる橋に関し、その境界性の背後に能の「橋懸り」の存在があると述べ、神秘的な描写を導入するための重要な装置として機能していることを指摘している。

三章「破戒」の風景描写に潜在している隠喩」では、島崎藤村の「破戒」の主人公瀬川丑松が橋やその周辺から眺める風

景の描写が、丑松の心境と密接に関わっていることを述べる。

また、この作品における橋が、時に被差別部落出身の人々とそうでない人々との関係を暗示していることを指摘し、作中での橋を渡るといふ行為が、作中人物同士の間関係を表すものであると述べ、そのような観点から、生徒が丑松を追って橋を渡することは、生徒の意識に変革がなされたこと、そして未来における人々の和解を暗示していることを指摘している。

四章「川」に見られる假橋と「神秘感」の一考察」では、岡本かの子の「川」について、まず男性主人公直助が「希臘神話」の「河神」と重ね合わせられていること、及び女性主人公と川との間に重要な結びつきがあることを指摘する。その上で、女性主人公の嫁入りのために、直助が「假橋」をかける箇所、特にそのことを表現した直助の詩における、橋のもつ意味の多重性、及び川を持つ意味の劇的な変化を指摘する。そして、そのような多義性が作品における「神秘感」を喚起していると述べている。

五章「橋の視点から見た「斜陽」の恋と革命」では、太宰治の「斜陽」において、作中に登場する橋が、恋愛関係と革命におけるかす子の決断を表していると述べ、さらにその両者が古い道徳に反するという共通の属性を有すること、そして、そのような態度が太宰のデカダンスに由来するものであることを指摘している。

六章「三島の「橋づくし」と近代」では、橋が暗示している「運命の逆転」の中で、四人の女性のうちただ一人願掛けに成

功するみなが、その精神性において、近代以前を象徴する存在であり、作品に三島の「反近代の理念」が読み取れることを指摘している。

七章「泥の河」における〈橋〉と〈舟〉の対立」では、宮本輝の「泥の河」において、馬車曳きの男が橋で死に、さらに男とともに喜一の父親と重ね合わせて考えることが可能な「お化け鯉」を信雄と喜一が目撃するのが橋の上であることから、橋が生死が交差する場所、あるいは異なる時間を透視する場所であると述べる。それと同時に、作品における橋が登場人物間の心理的距離を近づけ、確かな人間関係を作り上げようとするものであるのに対し、喜一の住む「舟の家」、あるいはそこから陸地をつなぐ渡しは、「もろい関係」を暗示するものであると指摘し、信雄と喜一が強固な関係を結べないことと関連づけている。

八章「近代文学に見られる隅田川の空間変容」では、隅田川とそこにおける橋、あるいは舟等の時代的变化を述べつつ、隅田川を描いた作品を論じている。扱った作品は様々だが、中でも永井荷風の作品が目立つ。そして、近代文学作品に登場する隅田川に見られるテーマを「喪失」、「死」、「探求」、「個人的成長／文明的発展」の四つに大別している。更にこれらのテーマのうちには、古典文学からの伝統が強く影響しているものがあることも指摘している。

そして終章「近代文学における〈橋〉の記号的伝達性に関して」では、これまでの解釈を踏まえ、近代文学における橋につ

いて、主に三つの視点からまとめている。

まず、近代文学に見られる、序章で述べられていた「風景描写」という手法の積極的な使用。そして、「歌枕」や「本歌取り」といった伝統的手法が用いられているにしても、その性格が古典文学におけるそれとは異なっている可能性。或いは、たとえ近代以前から文学作品に取り上げられていた場所であっても、「風景描写」が用いられる際には、「歌枕」の手法は控えられることを指摘している。

次に、画一性を理由に、近代以降の橋には特別な意味合いが込められていない、とする見解に反駁する形で、橋の外形や構造の多様性（尤も、著者によれば日本近代文学においては、そのような違いにより暗示される意味が決定されることは少ないらしいが）、橋の周辺の地理的条件の多様性を挙げ、その画一性を否定している。そして、橋が意味するものを探る上で、そのような地理的条件

や、橋で行われる行為をはじめとする描写の詳細を踏まえる必要性について述べている。

そして最後に、しばしば橋をはじめとする「境界」を、作家が自身の作品にふさわしい舞台として選択することと併せて、橋が作家の思想を表現し得ることを指摘している。

以上、本書の内容を簡単にまとめた。本書の意義としては、現れ方によっては、単なる景色の一部として見落とされてしまいがちな事象が、作品を解釈する上での重要な手がかりとなり得ることを、実際に作品を解釈することで示した、とは少なくとも言えると思われる。

また、巻末に掲載されている「〈橋〉が登場する主要な近代文学作品一覧」も力作である。

（二〇一四年八月 九州大学出版会 三三二頁 五四〇〇円＋税）

（九州大学大学院地球社会統合科学府博士後期課程一年）